

**NONAQUEOUS ELECTROLYTIC SECONDARY BATTERY**

Patent Number: JP5006780  
Publication date: 1993-01-14  
Inventor(s): WATANABE SHOICHIRO; others: 02  
Applicant(s):: MATSUSHITA ELECTRIC IND CO LTD  
Requested Patent:  JP5006780  
Application Number: JP19910156474 19910627  
Priority Number(s):  
IPC Classification: H01M10/40 ; H01M4/02 ; H01M4/58  
EC Classification:  
Equivalents:

---

**Abstract**

---

PURPOSE:To realize a nonaqueous electrolytic secondary battery having a high capacity and satisfactory cycle characteristic and high-temperature storing characteristic by improving a positive electrode active material in an improvement in positive electrode active material for nonaqueous electrolytic secondary battery.

CONSTITUTION:A positive electrode active material powder obtained by adding yttrium to LiCoO<sub>2</sub> or a composite oxide obtained by partially substituting the cobalt in this compound by a transition metal is used. Thus, the cycle characteristic and high-temperature storing characteristic as a secondary battery are significantly improved.

Data supplied from the esp@cenet database - I2

[TOP](#)

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-6780

(43)公開日 平成5年(1993)1月14日

(51)Int.Cl.<sup>5</sup>  
H 01 M 10/40  
4/02  
4/58

識別記号 庁内整理番号  
Z 8939-4K  
C 8939-4K  
8520-4K

F I

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数2(全5頁)

(21)出願番号 特願平3-156474

(22)出願日 平成3年(1991)6月27日

(71)出願人 000005821

松下電器産業株式会社  
大阪府門真市大字門真1006番地

(72)発明者 渡邊 庄一郎  
大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器  
産業株式会社内

(72)発明者 西山 晃好  
大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器  
産業株式会社内

(72)発明者 越名 秀

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器  
産業株式会社内

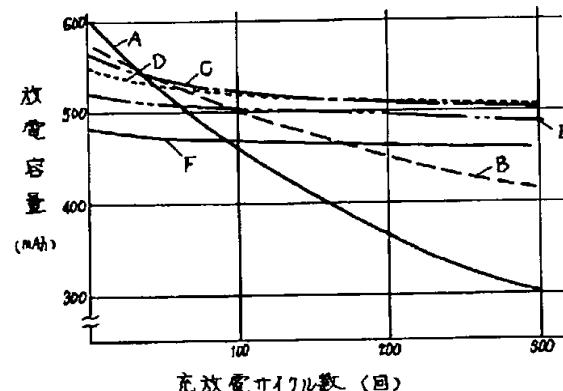
(74)代理人 弁理士 小鍛治 明 (外2名)

(54)【発明の名称】 非水電解液二次電池

(57)【要約】

【目的】 非水電解液二次電池用正極活物質の改良に関し、正極活物質を改良することで高容量でサイクル特性、高温保存特性のよい非水電解液二次電池を実現することを目的とする。

【構成】 LiCoO<sub>2</sub>またはこの化合物中のコバルトの一部を遷移金属で置換した複合酸化物にイットリウムを添加した正極活物質粉末を用いる。これにより二次電池としてのサイクル特性、高温保存特性が大幅に改善した。



1

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】イットリウム(Y)を添加した $\text{Li}_{1-x}\text{CoO}_2$  ( $0 \leq x < 1$ )もしくはそのコバルトの一部を他の遷移金属で置換したものからなる正極と、リチウム、リチウム合金もしくは炭素質材料からなる負極と、非水電解液とからなる非水電解液二次電池。

【請求項2】イットリウムの添加割合がコバルトに対しモル比で1~10%である請求項1記載の非水電解液二次電池。

## 【発明の詳細な説明】

10

## 【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、非水電解液二次電池、特にリチウム複合酸化物を正極に用いた電池の特性改良に関するものである。

## 【0002】

【従来の技術】近年、AV機器あるいはパソコン等の電子機器のポータブル化、コードレス化が急速に進んでおり、これらの駆動用電源として小型、軽量で高エネルギー密度を有する二次電池への要望が高い。このような点で非水系二次電池、特にリチウム二次電池はとりわけ高電圧、高エネルギー密度を有する電池として期待が大きい。

【0003】この要望を満たす正極活物質としてリチウムをインターラーチン、デインターラーチンすることのできる層状化合物、例えば $\text{LiCoO}_2$ 、 $\text{LiNiO}_2$ （例えば米国特許第4302518号）や $\text{LiCo}_x\text{Ni}_{1-x}\text{O}_2$  ( $x \leq 0.27$ )（特開昭62-264560号）などのリチウムと遷移金属を主体とする複合酸化物（以下、リチウム複合酸化物と記す）が提案され、これらの活物質を用いて4V級の高エネルギー密度二次電池の具体化開発が進められている。

## 【0004】

【発明が解決しようとする課題】 $\text{Li}_{1-x}\text{CoO}_2$  ( $0 \leq x < 1$ )（以下 $\text{LiCoO}_2$ と記す）は、リチウムに対し4V以上の電位を示し、正極活物質として用いると高エネルギー密度を有する二次電池が現できる。

【0005】しかし、逆に電位が高い故にプロピレンカーボネートやジメトキシエタンなどの有機電解液を分解するなど、電池の充放電特性に悪影響を与え、電池特性の劣化の原因となっていた。このような問題に対し、コバルトの一部をニッケル（特開昭63-299056号）、鉄（特開昭63-211564号）、アルミニウム、スズ、インジウム（特開昭62-90863号）で置換した複合酸化物を合成し、正極活物質を改質することにより優れた充放電特性が得られるという提案がなされている。

【0006】しかし、このような元素でコバルトを置換

2

したりリチウム複合酸化物は放電電圧が小さくなる傾向があり、本来の高電圧、高エネルギー密度という特徴を低減する結果となる。また、このようなリチウム複合酸化物は、充電状態で高温で保存すると、 $\text{LiCoO}_2$ と同様に著しく容量が減少するという問題が依然として残されている。

【0007】本発明はこのような課題を解決するもので、高い作動電圧を維持すると共に、優れた充放電特性、保存特性を有する二次電池を提供することを目的とするものである。

## 【0008】

【課題を解決するための手段】上記の課題を解決するために本発明は、正極活物質である $\text{LiCoO}_2$ にイットリウムを添加することで、高電圧を発生し、かつ優れた充放電特性と保存特性を示す非水電解液二次電池が得られることを見出だしたものである。

## 【0009】

【作用】 $\text{LiCoO}_2$ を正極活物質とした電池を充電状態で高温保存した場合、保存後の電池の容量、サイクル特性は極端に劣化する。これは電解液の分解や結晶構造の破壊が原因と考えられる。このような高電位における $\text{LiCoO}_2$ 上での電解液の分解反応や、結晶破壊を抑制することが、実用上の電池として非常に重要なポイントとなる。

【0010】本発明は $\text{LiCoO}_2$ にイットリウムを添加することにより、 $\text{LiCoO}_2$ 粒子の表面が酸化イットリウム( $\text{Y}_2\text{O}_3$ )、リチウムとイットリウムの複合酸化物( $\text{Li}_2\text{YO}_3$ )に覆われることによって安定化され、その結果高い電位においても電解液の分解反応や結晶破壊を起こすことなく、優れたサイクル特性、保存特性を示す正極活物質が得られることによるものである。また、この効果は単に $\text{LiCoO}_2$ にイットリウムもしくはイットリウムの化合物を混合するだけでは得られないものである。

## 【0011】

【実施例1】以下、図面とともに本発明を具体的な実施例に沿って説明する。

【0012】 $\text{Li}_{1-x}\text{CO}_3$ と $\text{CoCO}_3$ を $\text{Li}$ と $\text{Co}$ の原子比が1対1になるように混合したものの、酸化イットリウム( $\text{Y}_2\text{O}_3$ )を添加し、空気中において900°Cで5時間焼成したものを正極活物質とした。酸化イットリウム( $\text{Y}_2\text{O}_3$ )の添加割合は合成した主活物質 $\text{LiCoO}_2$ のコバルトに対しイットリウムのモル%で表すものとし、(表1)に示したように6種類の検討を行った。

## 【0013】

## 【表1】

電池	A	B	C	D	E	F
Y添加モル%	0	0.5	1	5	10	15

3

4

【0014】このようにして合成した正極活物質として100重量部、アセチレンブラック4重量部、グラファイト4重量部、フッ素樹脂系接着剤7重量部を混合して正極合剤とし、カルボキシメチルセルロース水溶液に懸濁させてペースト状にした。このペーストをアルミ箔の両面に塗着し、乾燥後圧延して極板とした。

【0015】負極は、コークスを焼成した炭素材100重量部に、フッ素樹脂系接着剤10重量部を混合し、カルボキシメチルセルロース水溶液に懸濁させてペースト状にした。そしてこのペーストを銅箔の両面に塗着し、乾燥後圧延して極板とした。

【0016】図1に本実施例で用いた円筒形電池の縦断面図を示す。正、負極それぞれにリードを取りつけ、ポリプロピレン製のセパレータを介して巻き状に巻回し、電池ケース内に収納した。電解液には炭酸プロピレンと炭酸エチレンの等容積混合溶媒に、過塩素酸リチウムを1モル/1の割合で溶解したものを用い、封口したものを試験電池とした。

【0017】図1において、1は耐有機電解液性のステンレス鋼板を加工した電池ケース、2は安全弁を設けた封口板、3は絶縁パッキングを示す。4は極板群であり、正極および負極がセパレータを介して複数巻き状に巻回されてケース内に収納されている。そして上記正極からは正極リード5が引き出されて封口板2に接続され、負極からは負極リード6が引き出されて電池ケース1の底部に接続されている。7は絶縁リングで極板群4の上下部にそれぞれ設けられている。

【0018】これらの試験電池を充放電電流100mA/h、充電終止電圧4.1V、放電終止電圧3.0Vの条件下で定電流充放電試験を行った。また、充放電を10サイクル繰り返した後、充電状態において60℃、20日間の保存試験（以下、高温充電保存と記す）を行い、保存後の電池における容量保持率を求めた。

【0019】このときの電池A～Fの充放電サイクル数と放電容量の関係を図2に示す。また、LiCO<sub>2</sub>へのイットリウムの添加量とそれに対応した電池A～Fの高温充電保存試験後の電池の容量保持率（保存後の容量/保存前の容量）との関係を図3に示す。図2より、イットリウムをまったく添加していない電池Aは初期の放電容量は大きいものの、充放電に伴う容量低下は大きく、300サイクル時点では初期容量の50%となる。これに対し、イットリウムを添加した電池B～Fでは添加量が増加するに従い容量は低下するが、充放電サイクルに伴う容量低下はAに比べて著しく緩和され、イット

リウムを1モル%以上添加した電池C～Fでは300サイクルの時点でも初期容量の80%以上を維持している。

【0020】また、図3からイットリウムを添加することにより、高温保存後の電池の容量保持率は著しく向上し、イットリウムを添加しない電池Aが52%であるのに対し、1モル%以上添加した電池C～Fでは86%以上を示した。さらに添加量を増加しても容量保持率は余り変化しなかった。イットリウムを15モル%添加した電池Fではサイクル特性、保存特性共に良好であるが、LiCO<sub>2</sub>の表面被覆率が大きくなるので放電容量がかなり小さくなる。このためイットリウムの添加量は1～10モル%程度が適当である。

【0021】LiCO<sub>2</sub>のコバルトの一部をニッケル（特開昭63-299056号）、鉄（特開昭63-211564号）、アルミニウム、スズ、インジウム（特開昭62-90863号）で置換した場合、コバルトと固溶体を形成してLi<sub>1-y</sub>Co<sub>1-y</sub>O<sub>2</sub>（0≤y≤1：MはN<sub>1</sub>、Fe、Al等）で示される複合酸化物となるため、表面を安定化させるイットリウムのような効果は得られない。

【0022】また、これらのコバルトの一部を遷移金属で置換した複合酸化物は、平均電圧が小さくなる欠点があったが、イットリウム添加の場合はこのような電圧低下は認められなかった。従ってイットリウムは最適な添加剤であると言える。

【0023】なお、本実施例では正極合成時の出発材料としてLi<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>とCoCO<sub>3</sub>を用いたが、それぞれリチウムとコバルトの酸化物、水酸化物、酢酸塩などであっても構わない。添加するイットリウムについても酸化イットリウムを用いたが、他のイットリウム化合物であってもよい。また正極活物質としてLi<sub>1</sub>CO<sub>2</sub>を用いたが化合物中のコバルトを遷移金属で置換した化合物でも同様の効果が認められる。

【0024】また、負極として炭素質材料を用いたが、リチウム金属やリチウム合金であっても構わない。さらにまた電解液には炭酸プロピレンと炭酸エチレンの等容積混合溶媒に、過塩素酸リチウムを1モル/1の割合で溶解したものを用いたが、他の溶媒にリチウム塩を溶解した電解液でも同様である。

【0025】

【発明の効果】以上の説明で明らかなように、本発明によれば正極活物質であるLi<sub>1</sub>CO<sub>2</sub>に適量のイットリウムを添加することにより、充放電サイクル特性および

5

高温保存特性に優れた非水電解液二次電池を得ることが  
できる。

## 【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の実施例における円筒形電池の縦断面図

【図2】同電池の20℃での充放電サイクル特性図

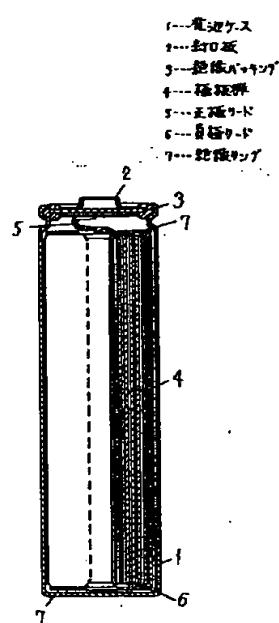
【図3】イットリウムの添加量と、それに対応した電池  
の高温保存後の容量保持率との関係を示す図

## 【符号の説明】

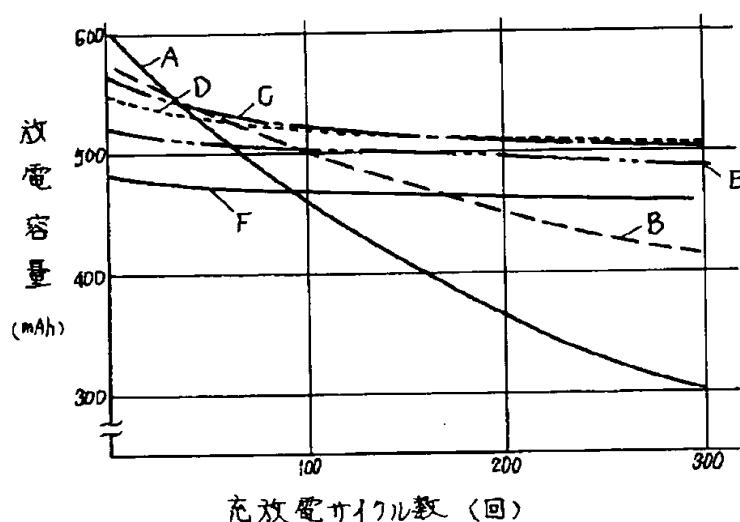
6

- 1 電池ケース
- 2 封口板
- 3 絶縁パッキング
- 4 極板群
- 5 正極リード
- 6 負極リード
- 7 絶縁リング

【図1】



【図2】



【図3】

